

# いのちの水

二〇一八年

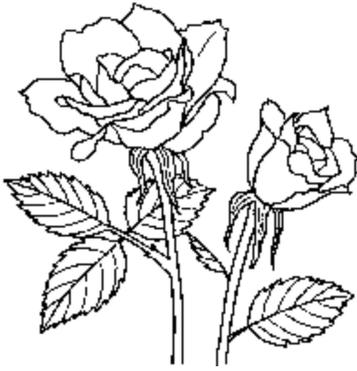
七月号

六八九号

あなた方に真理を言う。あなた方のうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、私の天の父はそれをかなえてくださる。(マタイ18の19)

## 目次

・高き山に	1
・この岩の上に	2
・天の国の鍵	4
・神の大いなる力	5
― 詩篇68	5
・福音とサタン	10
・お知らせ	11
七月の北海道他 県外での 集会・北田康広の讃美歌 CD「アメイジング・グレイス」	11



### 高き山に

私たちは低いところにいるとき、さまざまのものは見えな  
い。山に上るほどに、視界が  
開け、それまで見えなかった  
さまざまのものが見えてくる。  
これは、目に見えない世界―  
霊的世界においても同様であつ  
て、私たちがより高きへと導  
かれるにつれて、それまで見  
えなかったものが見えてくる。  
自然の山において高きへと  
上るには、体力がいる。足が  
弱くては上れない。

て、霊的な力が必要となる。  
その力を与えてくださるお  
方がいなければ、私たちは地  
上の低いところにさまようば  
かりである。  
登山においても、高き山ほ  
ど、また登る人が少ない山ほ  
ど、すぐれた指導者がなけれ  
ば、難しい。最も高きところ  
へと登られた方に導かれてい  
く必要がある。  
霊的な高みへと登る道は、  
狭い。キリストは、「狭き門  
から入れ、命に至る道は狭く、  
そこを歩く人は少ない」とい  
われた。

山への道はのぼれない。  
登る足どりは、弱くて難し  
いときでも、神の力、キリス  
トの力を与えられるときには、  
のぼっていくことができる。  
「めぐみの高き嶺」(\*)  
へと導かれるとき、そこには、  
霊的な光景が開けてくる。  
そこで新たな語りかけを聞  
いた人たちが、書き綴っていつ  
たことが伝えられ、広められ  
て聖書となった。  
パウロは第三の天にまでひ  
きあげられたという。  
ダンテも地獄篇から煉獄篇  
を経て天国編への霊的な登り  
を大作「神曲」で描いた。そ  
こでも、ダンテのような強固  
な意志を持っていた人であつ  
ても、なお、導きによらずば、  
高みへと上がれないことが、  
神曲全体をも貫く主題の一つ  
ともなっているほどである。  
この世の山の光景は、目の  
見えない人にとっては、開け  
た風景や広大な見晴らしは与  
えられない。

しかし、その場合に必要な  
のは、やはり力が必要であつ  
て、からだの弱い人、病人、  
また老齢の人であっても登る  
ことができる。

霊的な高みへの道も同様で、  
導きなくしては歩めない。  
主はわが牧者、羊飼いと  
は、愛と真実の神が導かれる  
のでなければ、私たちは高き

しかし、靈的な高きへとひきあげられるときには、盲人も病人もあるいは、独房のなかでも、最初の殉教者であったステファノのように、石で撃ち殺されようとするとともに、その高みへとひきあげられて天の国が開けて、周囲の敵対する人たちへの祈りをもって地上の命の最後とした人もある。

苦しい試練が降りかかってきた時、その苦しみゆえに高きへのぼるどころか、闇をさまよい、ますます落ちていくのではないかと恐れ、さらにそうした状態が、長く続くこともある。

すでに数千年の昔にかかれた詩に、「神様、神様、どうして私を捨てたのか！」(詩篇22)という叫びが記され、それはそのままキリストが十字架ではりつけの耐えがたい痛みと苦しみのなかから、叫んだ言葉となっている。

それは、高みへの道は、決して

単純な道でなく、耐えられないと思われるような道でさえありうることを示している。それにもかかわらず、そうした苦悩に一人あえぐ歩みの後で、神は高き嶺へと導かれることが、さきほどの詩篇にも記されて、キリストご自身も神のもとにて復活されたのだ。

私たちは、小さき者ゆえに、何十年という信仰の歩みにもかわらず、人生の途上にあつて苦しみや悲しみゆえに低いところをさまようようなこともしばしばである。

しかし、神の導きを受けるなら、毎日の生活において、そのような靈的な高みへと少しでもひきあげられ、この地上を去るときには、究極的な高みなる天の国へと復活させていただける約束を信じて歩みたい。

(\*) 1、恵みの高き嶺(ね)

日々わがめあてに  
祈りつ歌いつ

われはのぼりゆかん  
繰り返し  
光と清きと

平和にみちたる  
恵みの高き嶺  
われにふましめよ

2、おそれのある地に

などかはとどまらん  
ぎわくの雲をば  
早く下に踏まん

3、さぎりのかなたに

あまつ日かがやく  
うきよをあとにし  
なおものぼりゆかん

4、けわしき坂をも

直ぐなる岩をも  
み助けあるみは  
遂にのぼりきらん(新聖歌339)

### この岩の上に

イエス(キリスト)を何者で

あると思うのか、それはキリスト信仰においても決定的な重要性を持っている。イエスは、ソクラテスや孔子、ゴータマ・シッダルタ(ブツダ)

などと並ぶ偉人なのか、それとも、偉人とはいえ罪ある人

間とは根本的に異なる神にひとしい存在なのか、ということである。

私たち日本人は、子供のときから、キリストは、偉人伝の一つにあって、偉い人間なのだ、というのが自然な受け止め方であつて、人間を超えた「神」に等しい御方であるなどということとは、考えたこともないのが普通である。

イエスは、教えをしばしば語られたガリラヤ湖の北部から、直線距離にしても40キロ以上もあるような遠い丘陵地帯にあるフィリポ・カイサリア地方にまで行かれたとき、弟子たちに、自分のことを何者だと思ふのかという重要な問いかけをされた。

なぜ、どこでも問うことができるこの問いかけをわざわざそのような遠いところに行つたときになされたのか。

ここは、ガリラヤ湖に流れ込むヨルダン川の主たる水源となつていて、豊かな水が

湧きあふれている重要なところである。そしてそこでは偶像をまつる場所でもあった。

しかし、イエスは、命の水があふれる水源は人間が作った偶像ではなく、イエスご自身であることを暗に指し示すために、このような遠くの特異な水あふれるところを選んだと推察される。

：イエスは、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」と問うた。

弟子たちは、洗礼者ヨハネだと言う人も、預言書エリヤだ、エレミヤだなどと言う人もあると答えた。

イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言っのか。」

ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。すると、イエスは答えた。

「あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父な

のだ。

わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。

陰府の力もこれに対抗できない。(マタイ16の14、18より)

岩とは、何か。ペトロという人間が岩であるかのように、この個所では見える。

じつさい、そのために、そのように受けとる人たちも多い。

しかし、すぐ後の個所で、イエスがみずからが聖書学者や長老、祭司といった指導的な人たちから憎まれ、捕らえられて殺される。しかし三日目には復活する。イエスが地上につかわされてきた神の御計画を語った。

すると、ペテロはこともあろうに、イエスを脇に引き寄せ、そんなことがあつてはならないとイエスを叱責したのであった。

しかし、キリストから「サタンよ、退け！」と厳しく叱責されたことや、その他の聖書

の個所(\*)が明確に示しているように、彼自身は決して岩ではなかった。

(\*)「ケファ(ペテロ)は、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていないに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとした」。 (ガラテヤ2の12)

ペテロは、異邦人を汚れたものとしてはいけないと、夢の中の啓示ではつきりと知らされた(使徒言行録10の9)にもかかわらず、後になって、割礼の者と食事を共にしなくなった。そのためにパウロから面責された。

さらに、次のように自分が上に立ちたいというこの世的な願望を持っていた。

：異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」

ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。

「先生、お願いすることをか

なえていただきたいのですが。」  
イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、  
二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしども一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」  
イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっている。 (マルコ10の34、38)

このように、聖書がペテロについて記している内容を読めば、人間ペテロが「岩」のような強固な人物、そこに後のキリスト者たちの集りの不動の根底(岩)となるようなものでは到底あり得ないのわかる。

でないなら、何が岩なのか。それは、岩とは強固なもの、壊れない象徴であり、それは、イエスを神の子(神と同質)であり、それゆえに救い主であると信じる信仰である。信仰・希望・愛こそがいつもで

でも続くと言われているとお  
りである。(コリント13の  
13)

そしてその信仰は啓示に基づ  
く。啓示とは神からの直接の  
言葉であり、光であり、とき  
には、霊的に見えるものとし  
ても与えられることがある。  
それゆえ、神の言葉が岩であ  
り、その神の言葉を与える神  
こそが岩の根源である。  
詩篇では、この啓示、信仰が  
しばしば記されている。

主はわたしの岩、砦、逃れ  
場、わたしの神、大岩、避け  
どころ、わたしの盾、救いの  
角、砦の塔。

主のほかに神はない。神のほ  
かに彼らの岩はない。

主は命の神。わたしの岩をた  
たえよ。わたしの救いの神を  
あがめよ。

(詩篇18の3、32、47)

このように、繰り返し、神こ  
そ私たちの岩であると告白さ  
れている。

このことは、こうした詩篇が  
書かれてから三千年ほどとい  
う長い時間の経過にあっても  
変わることはない。

人間の権力、支配などいかに  
ある期間は強大であろうとも、  
またさまざまの評論家や学者、  
思想家などの人間の考え等々  
も、すべて長い時間の流れに  
おいて、たちまち消え去るか、  
あるいは徐々に消えていく。

永遠不動の岩といえるものは、  
天地宇宙の創造をされて今も  
万物を支えておられる神のみ  
であり、その神と本質を同じ  
くするキリストである。

そしてその神(キリスト)の  
言葉こそが、私たちにとって  
の永遠の岩である。

### 天国の鍵

鍵ーこの言葉は、私たちにさ  
まざまの暗示を与える。

私たちの生きる過程で、否、  
日常的にさまざまのことで鍵  
がかかっているという事態に  
直面する。

自分の心の世界さえ、いわば  
扉が閉じられていて開かない、  
自分の本質がどれほど罪深い  
か、愛や真実がないのかとい  
うことさえ見えていない。

人生の途上で、大きな苦難や  
悲しみがふりかかってきたと  
き、初めて自分というのがい  
かにいろいろの意味で弱く、  
愛や真実などのない存在であ  
るかが示される。

苦難が鍵となる。

それは、ほかのことにに関して  
もいえる。使徒パウロが、

「神の国にはいるには、多く  
の苦難を経なくてはならない。」

(使徒14の22)と言ったが、  
苦難という鍵なくしては、神  
の国にはいることができない  
ゆえに、神は人間にさまざま  
の苦しみや悲しみを与えられ  
る。

さらに、神の愛がどれほど大  
いなるものであるのか、弱い  
人、絶望している人にも、驚  
くべき力を与えるものか、そ  
うした神の愛に関する世界に  
も鍵がかかっているために、

多くの人はわからないままで  
ある。

私自身もまったくそのような  
世界は21歳になるまでは知ら  
なかった。完全に鍵がかかっ  
ていたのである。

しかし、当然その鍵が開かれ  
て、神の国の世界というもの  
が少しずつであつても知らさ  
れてきたのを思い起こす。

神の国と深くかわるものが、  
周囲の自然の世界であり、青  
空や海、河、風の動き、雲の  
かたちやその色合い、無数の  
植物、花々の多様性やその美、  
星空の永遠の美、昆虫や動物  
たちの驚くべき能力やその姿  
等々、無限の世界がある。

そうした世界を開ける鍵ーそ  
れは小さいものであつても、  
神が生まれつき各人に与えて  
おられる。

しかし、その背後に愛と真実  
をもって創造された神を知ら  
されるときに、初めてそうし  
た自然の奥深い本質の世界が  
開かれていくーそれは私自身  
の実感だった。

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつなされる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」

(マタイ16の19)

この言葉は、イエスを神の子と等しい存在と告白したペテロに対していわれたが、次の個所からわかるように、これは単にペテロに言われたのではなく、「あなた方に」と言われ、そのように信じるすべての人たちに約束された言葉である。

…あなた方に真理を告げる。あなたが地上でつなぐことは、天でもつながら、あなたが地上で解くことは天でも解かれる。また、あなた方に真理を告げる。どのような願いであれ、あなた方のうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、

天の父はそれをかなえてくださる。

一人または、三人が私の名によつて集まるところには、私もそのなかにいるのである。

(マタイ18の18、20)

地上でつなぐこと、天でもつなされる。地上で解くことは、天でも解かれる。すなわち神の御前でも実現される。

地上でつなぐ、罪ありとする、悪しき思いや行動を引き起こすサタンに対して、つなぐことは、さばきと結びつけることである。そうすることで、たしかにサタンはその働きがつ

ながれる。「天路歷程」にも、天の国への道であるところで、ライオンがいた。それに恐れしたが、よく見るとそのライオンは鎖でつながれていたという個所がある。

人々に対して働くサタンの力を神の正義の力、さばきの力に結びつけようとすること。それは神の国がきますように

との祈りと共通している。

そして、逆に、祈り、とくに二人三人でだれかを神の力と結びつけようとするとき、それは聞かれる。天においてもそのようになされるという約束である。

じつさい、中風の人は、運んできた人たちの祈り―病人を神の力に結びつけようとするときに癒された。人を打ち倒している病気の力、あるいは悪の力からの解放を祈るとき、それはかなえられる―その時は私たちには分らないが―ということである。

すでに述べたように、天の国の鍵は、ペテロだけでなく「あなた方」とあるように、信じる人すべてに与えられることとして記されている。

そして、それに続くこと、二人三人集まるところに私はいる―すなわち私たちの祈りがキリストに聞かれていることである。

信仰により、祈りによって与えられる賜物のうちで最も重要なのは罪赦されることである。それは滅びと命を分けることであるからだ。

その最大の賜物が、共同の祈りと深くかかわっていることを示している。

天の国の鍵という大切なもの―それは信じる人たちが共同で使うのが期待されているものなのである。

### 神の大きいなる力

―詩篇第68編より

旧約聖書の詩篇は、一般の人はいうまでもなく、多くのキリスト者にとつても全体としてどこかなじみにくい、わかりにくいというものが多い。

それは、敵への激しい言葉や、見慣れない地名や人名、言葉、オーバーだと思われるような、あるいは現代の日本では不可解な用語等々のためでもある。

しかし、そうしたものからキリストの時代へと流れ込み、さらには現代の私たちへと数千年という歳月を経て流れ続けている真理の流れがあり、それを時として見られるわかりにくい表現からいわば、濾(こ)しとっていくことが求められている。

そこから見えてくるのは、その深き流れはいのちであり、それゆえに現代の世界においても、至るところで歌われ、演奏されている讃美歌の源流となり、また、バッハやベートーベン、モーツァルト、ブラームス、ドボルザーク、メンデルスゾーン等々が作曲したキリスト教にかかわる音楽にも流れ込み、いまま絶大な影響を与え続けている。

また、そこに記されている深遠な霊的世界は、例えば詩篇22の冒頭の「わが神、わが神、どうして私を捨てたのか！」という叫びが、はるか後のキリストの十字架上での最も苦しい最後の叫びそのものであ

たことからもうかがうことができる。

キリストの苦しみは万人の罪を担って死なれた、比類のないものだったが、それをすでに千年ほど昔とされるダビデの詩が預言的に記していたのである。

「このように、詩篇の内容は人間のもっとも深い魂の叫び、苦しみ、喜び、賛美等々の世界を指し示し、照らしだしていると言えよう。」

詩篇68篇より

神は立ち上がり、敵を散らされる。

煙は必ず吹き払われ、蝨は火の前に溶ける。

神に逆らう者は必ず御前に滅び去る。

神に従う人は誇らかに喜び祝い

御前に喜び祝って楽しむ。

神に向かつて歌え、御名をほめ歌え。

雲を駆って進む方に道を備えよ。

その名を主(ヤハウエ)と呼ぶ方の御前に喜び勇め。(2~5節)

神は聖なる宮におられる。みなしこの父となり

やもめの訴えを取り上げてくださる。

神は孤独な人に身を寄せる家を与え

捕われ人を導き出して清い所に住ませてくださる。

背く者は焼けつく地に住まねばならない。(6~7節)

2節から5節までは、神の偉いなる力を言っている。絶えず神の力をなくそうとする悪の力がこの世には満ちている

が、神はそのような敵対する力を追い払われるという確信

がまず書かれている。

正義の神の力の前には、いかなる悪の力が煙のようにたちこめても、必ず吹き払われるし、固い蝨が火によって、

水のように溶け、流れ落ちていくように、悪の力は、神の力の前には、いかに強固に見えても溶け去っていく。

こうした確信は目に見えるものから得たのではなく、神からの直接の啓示によるものであった。

「敵」とは、キリスト以降の現代の私たちにとっては、具体的な人間や民族、国家などでなく、神の真実や正義を踏みじろうとする悪の力、目には見えない闇の力を意味している。

新約聖書では、次のように記されている。

：わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、暗闇の世界の支配者、悪の諸霊を相手にするものである。(エペソ書6の12より)

旧約聖書ではこのように直接的に特定の敵対する者に対していわれるが、私たちは新約聖書の世界に生きる者として、こうした旧約聖書を受け取っていく必要がある。

旧約聖書のこうした表現は、キリスト以降の靈的な戦いを預言的に記したものとと言えるからである。

雲を駆って進む方、また荒れ果てた地を行進される神、そして神の戦車は幾千、幾万とある。神は悪の力と戦いながら前進していくさまが記されている。

さらに、神よ、あなたの行進が見える。わたしの王は聖所に行進される。というふうな、この詩は周囲に敵対する力、闇の力を打ち破って前進していく神がここにあるというのがうかがえる。

神というと、静かな山のように動かない存在として受け取ること多いが、この詩は動的で、絶えず前進して止まない神の姿を表わしている。

神が立ち上がって、敵を散らされるといふ、普通の文としても解釈できるが、これは祈りの文とも読むことができる。だから訳も両方に分かれてい

る。日本語では命令文と平叙文とが同じ表現であるということはないが、原文では重ねていうこともある。

このように詩篇を読むときは一つだけの訳を見ているだけでは、意味が狭くなるということがある。

外国語訳では立ち上がって敵を追い払ってくださいという方が多い。しかしこの祈りの前には神はそうしてください、という確信があるからこそ、それがなければ祈ることはできない。

このような詩を読んで、私たちも神はどこにおられてじつとしていただけのイメージではなく、立ち上がって大きな闇の力を排除しながら進んでいく、力ある動的な姿を受け取ることができる。

また雲に乗ってという訳もある。雲は自由にどこにでも動き回るといふことで言っている。こうしたことから、再臨のキリストも雲に乗って(雲とともに)来られるというよ

うな表現が用いられている。

このような力強い神と、人間に対して愛をもつ神の姿が並列しておかれている。非常に大きな力を持っているものは、小さな物を無視するということが多い。大きな力を持っている者は、それだけいつそう、部下がいるし、関わる者がいるから、いちいち小さいこと、弱い者に目をとめられない。

しかし聖書の場合には非常に大きく宇宙的な神であるのに、6節にあるように、みなしごの父となり、やもめの訴えを取り上げてくださり、孤独な人に家を与える。このように弱い者に安らぎを与えるお方だということが並列して置かれている。

…神よ、あなたが民を導き出し、荒れ果てた地を行進されるとき  
地は震え、天は雨を滴らせた  
あなたの民の群れをその地に

住ませてくださった。

恵み深い神よ、あなたは貧しい人にその地を備えられた。

(8)

この箇所は過去の歴史である。出エジプトのことを関係づけて言っている。

神の大きいなる力とそれはたつきは旧約聖書ではこのようにしばしば出エジプト記のときのこと記される。その時に、神がさまさまの奇跡を起こしてイスラエルの人々を救いだしたことを思い起こし、汲めども尽きない力としていた。

ここでも弱きものを顧みる神ゆえに、貧しい人に地を与えたと特に書かれている。

…主は約束をお与えになり大勢の女たちが良い知らせを告げる

「王たちは軍勢と共に逃げ散る、逃げ散る」と。  
全能者が王たちを散らされる  
とき ツアルモン山に雪が降るであろう。

パシャンの山 峰を連ねた山よ、なぜ、うかがうのか  
 神が愛して御自分の座と定められた山(エルサレムのある山)を  
 主が永遠にお住みになる所を。  
 (12~17節より)

12節からはわかりにくい、神と神の力を与えられた人達が前進していくときには、この世の力を持った人達はみんな逃げ去っていくということである。

14節は、神が自由に宇宙空間を飛び翔る、この世界のいかなるところへでも自由に、ただちに行くことができるということ、神が雲に乗ってくるといふ表現で書かれている。

15節、ツアルモンの山とはどこか分かっていないが、王たちが散ると雪が降るといふのは不思議な言い方である。これは敵対した者が散らされていった印として雪が降らさ

れるという、雪が降るといふ自然現象も神の現れと受け取れる。

私たちが言えば、自分を非常に苦しめた悪の力が、信仰によってそれを勝利したら、梅の花を見て、これは神が勝利のしるしとして寒い冬の中にも梅を咲かせてるんだと受け取る人には、そう感じることが出来る。

私たちが、万物を創造した神を信じ、すべての現象の背後には神の正義と愛の力があるのだと信じていくときには、このように一見単なる自然現象と見えるものなかに、深い意味を感じ取ることが出来る。

パシャンの山は死海の東から北東方面に至る広い領域を言い、そこにヘルモンに続く山々がある。そこから山々を見たら、たかが800メートルほどしかないエルサレムの山を見て、うかがい見る、あるいはねたむというのはどう

いうことが。

それは、神の力が非常に大きいから、周囲のさまざまな権力や支配をもった者も、妬みをもつていつも神の力を見つ、隙があればつけ込もうとしているという意味で、周りの者がいつも取り囲んでいるという状況を、このように山々の連なりからも連想している。

自然現象と人間の歴史の現象とが絶えず結びあつて、作者の眼前に浮かんでくるさまがうかがえる。

…神の戦車は幾千、幾万。

主はそのただ中におられる。

主よ、神よ あなたは高い

天に上り、

人々をとりこし 人々を貢

ぎ物として取り、背く者も取

られる。

彼らはそこに住み着かせられ

る。(18~19節)

このように、神の力と周囲

の様々なものが、いろいろな意味を持って次々と浮かんでくるので、この詩を書いた人には神の戦車がありありと見えてくる。シナイの神は聖所にいますというのは、たくさんの戦車を従えて、聖所に進んでこられたという意味である。ここでも動的な神が書かれている。神が悪の力と闘う武器は、さまざまのものがあ

り、この詩の作者にはそれははつきりと見える。  
 高い天に上つてとりこにしたというのは、悪の力との戦いの最中で、さまざま人々を屈服させ、それを神への献げ物として受け取ったというようなことである。神の大きな力をあらわしている。

主をたたえよ

日々、わたしたちを担い、救

われる神を。

この神はわたしたちの神、救

いの御業の神

主、死から解き放つ神。

神は必ず御自分の敵の頭を打ち

咎のうち歩み続ける者の髪に覆われた頭を打たれる。

(20~22節)

このような大きなスケールから、20節からは再びわたしたちの、個人的なことも含めて書かれている。

その神とは日々、わたしたちを担い、救われる神である。私たちの毎日の生活で、病

みや人間関係、事故、災害、さまざまな苦しみがふりかかってくるが、そうした重荷に悩む人間を担ってくださるといふ。このことは、知識や学問でなく、いかに無知なものであっても実感として与えてくださることであり、現在もまさにそうした日毎の実感ゆえに、キリスト信仰から離れることをしない人たちが世界中に無数に存在する。

またここでは神は死の力から解き放つとも書かれている。

これは、人間の根本問題である。最大の力は死の力であって、いかなる権力者も、すべて死の力に呑み込まれていく。その力からの解放がすでに数千年前に記されている。

戦争があれば、たくさんの人が次々と死んでいく。死んだらすべて終わりというのが現代の日本でも常識的な受け止め方である。

そしてこの詩のかかれた数千年前は、まだはつきり復活ということはあまり啓示されていなかったけれども、この詩の作者は非常に大きな神の力を啓示されていたので、死の力からも解き放つということとを霊的に示されていた。一種の予言的な啓示である。

そしてまた悪の力が書かれ、不正な道に歩み続けてやめようとしない者には、その悪が裁かれる。悪の力の頭というの悪の根源という意味で言っている。

主は言われる。「バシャン

の山からわたしは連れ帰ろう。海の深い底から連れ帰ろう。

(23節)

これは、躍動的な表現で、はるか遠くの山々のことに触れ、次には海の底ということふうに、自由自在に書かれている。海の底、敵の力に置かれた、または闇の中にいた人々を連れ帰るといふことである。

神よ、あなたの行進が見える。わたしの神、わたしの王は聖所に行進される。

聖歌隊によつて神をたたえよ。

エジプトから青銅の品々が到来し

クシュは、神に向かって手を伸べる。

地の王国よ、共に神に向かって歌い

主にほめ歌をうたえ

いにしえよりの高い天を駆つて進む方に。

神は御声を、力強い御声を発せられる。

力を神に帰せよ。

神の威光はイスラエルの上にあり

神の威力は雲の彼方にある。神は御自分の民に力と権威をくださる。神をたたえよ。

この詩の作者には、シオンの聖所に神が行かれるのが見えた。これは神がさまざまな場所、さまざまな戦いを終えてシオンに勝利の行進をしているということである。

最後の段落では、この詩の作者に示された未来の姿が記されている。

神のもとにさまざまな国の王たちが献げ物を携えてくるのが見える。このように、将来的にはイスラエルの神の民の周りには、さまざまな敵対するキリスト以降の私たちが言えば、じつさいの国とか民族でなく、悪の力そのものを、神が滅ぼして、最終的に未来においては、偶像崇拜していたところ、エジブ

トからも神に向かつて献げ物をするようになるというように、将来を展望している。

クシュという地名であらわされているのはエチオピアのことで、この国は世界でも最も早くキリスト教の入った地域の一つともなっていて、今日も国民の多数がキリスト信徒であり続けている。(\*)

(\*) 2007年の国勢調査では、キリスト教が33.8%と最も多く、続いてイスラームが33.9%(インターネットの辞典「ウィキペディア」による)

再び最後に、神は聖所にいまして、ご自分の民に力を与えるので神をたたえようと、この詩は、最初から最後まで、神のもつ非常に大きな力、支配をさまざまにイメージを絡ませながら言っている、わかりにくいところもあるが、自由自在に世界のさまざまな現象、表象を用いて述べている。

このように物事を非常に大きく、時間も歴史も、宇宙も、過去、現在、将来も何もかも

ひっくり返してこのような詩を作る大きさというのは、神そのものが無限に大いなるお方であるからである。

この詩の表現が一般的には親しみにくいものがあるが、ここに込められた内容は、この詩の作者が霊的に示され、深く実感したことが書き綴られている。

現代の私たちは、この詩の内容とは逆に、真実と愛に満ちた神、全能の神などいないという風潮がとくに日本では広く浸透しているが、そうしたただなかで、私たちは、心の耳を澄ませ、霊の目を開いて、数千年にわたって伝えられてきた真実の神がいかに大いなる存在であるかを、学ぶ助けとしたい。

## 福音とサタン

キリストは、弟子たちを遠い地へとわざわざ連れていき、「私のことを何と思うか」と尋ねられた。

ペテロは、イエスのことを「あなたこそ、神の子」と答えた。神の子という意味は、人間ではなく、神と同質の存在だということであり、イエスは優れた預言者たちの仲間でもなく、優れた宗教家でも、学問を修めた人でもない。

ペテロの告白は、イエスは、そうした人間ではない、「神と同じである」と告白したのであった。

そのようなことを告白できるのは、人間の思索や伝承とかでもない。それは神から選ばれ啓示されたのだと、言い換えれば、神から直接知らされたのだ、といわれた。そしてそのような信仰の上にエクレシア(教会)を建てると言われた。そして、ペテロに天の国の鍵を授ける、つまり、祈りが聞かれると言われた。

その直後のことである。イエスは、弟子たちに、これから起こること、つまり、いよいよ、律法学者などの指導者

から捕らわれ、殺されることを伝えた。

イエスは、わたしたちの罪があがなうために殺され、三日目に復活する。それが、福音の根本である。その根本を聞いて、ペテロは、厳肅な気持ちになることなく、イエスをわきに引き寄せて叱った。

イエスは、通常の偉大な人間とか預言者ではなく、「神」と等しいお方であると告白したペテロが、その直後に、イエスの言葉を信じようとせず、そんなことがあつてはいけないと、イエスをわきに引き寄せて叱った。

ペテロには真理がうけいれられなかったのである。それが、イエスが神である、と神からの啓示を受けて告白したそのあとであった。

ここにいかに啓示を受けてもそれは部分的なものであることを示している。私たちは、信仰を与えられていても、限界がある。イエスは神と同じと、信じても毎日なお、信じ

切れない弱さがあるのが人間である。

しかし、その弱さのただなかに力を与えるのが聖霊である。

福音は、よき知らせ、という意味である。人間は普通の良い知らせ—勉強とか仕事で周囲からほめられた、赤ちゃんなが誕生した、よい大学に合格した、スポーツで一番になった—等々は、誰でも受け入れるが、キリストの真理の良い知らせは、不思議なほどに受け入れないで拒むことが多い。キリストも初めてユダヤ人の会堂で真理を語ったとき、聞いていた人々は初めのうちはその霊的な力のこもった内容に驚いたが、すぐに人々は、キリストを会堂から追い出し、崖に連れて行って突き落とそうとした(・)ということが記されている。

(\*)…人々は、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。(ルカ4の29)

この世においては真理は必ず敵を持つ。

今日まで、世界に多大の影響を及ぼしてきたギリシャ哲学の基盤となったソクラテスも、真理を語ったゆえに憎まれ、ついに死刑とされた。

キリストの福音という、良い知らせを妨げようとする力がある。それは、創世記に、アダムとエバが必要を全て満たされていたのに、たつたひとつ食べてはいけないという木の実を誘惑されて、食べてしまった。その力が今も働いているのである。

良いものに従おうとするとき、そこから、気持ちを離そうとする力が働く。サタンの力である。

イエスはペテロがイエスを叱ったとき、「ペテロ、そんなことを言うてはいけない」と言うのではなく、「サタンよ、ひき下がれ」と言った。イエスは、目には見えないサ

タンが働いたことをはっきりと見たのである。

根本はサタンの力であり、サタンの力を引き下がらせ、その闇の力を追い払えば、よい状態にもどる。

誰の心にも、悪霊がはいることがある。そうすると悪を行なう。

しかし、イエスは、弟子たち、つまり信じる者に悪霊に勝つ力を与えた。人間には、感情があり、神の力が見えなくなることがある。このようなときにサタンが働く。ここにははたらくサタンを、追い出してもらう必要がある。日曜日の礼拝もサタンをおいだしてもらったためでもある。

主イエスの12弟子たちが、この世へと送り出されるときに、主が与えたのは何であつたか。それは悪の霊を追い出す力であつた。

…イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権

能をお授けになった。

汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであつた。(マタイ10の1)

人間は、すぐに、神のことを思わないで、人のことを思う。イエスの清さ、広さ、高さ、長さ、それを思わないで、人間のことを思いがちである。何が起こつても、神の愛、神の正しさをまず、信じて、受け入れることが求められている。

すべてのことについて、神を思う。背後で、よきことをなされた、神に感謝する。つねに、「サタンよ、引き下がれ」とのみ言葉を待ち望み、そこから、「聖霊よ、来てください」と祈ることが求められている。

求めよ、さらば与えられる—との約束があるゆえに。

お知らせ

七月に、吉村孝雄が、名言

葉を語らせていただく集会の案内。

北海道の瀬棚、札幌での集会、それ以降の各地での5月号でお知らせしましたが、その後追加、修正、などがありましたので、再度ここに掲載します。

7月12日、15日は北海道での瀬棚聖書集会、その後は札幌での交流集会、苫小牧での集りの後、例年のように、主の許しあらば、東北、関東、中部などの各地で御言葉を語らせていただく予定です。小さな集りであっても主が働いてくださって、神の言葉の真理が表されますようにと願っています。

(なお、10日(火)は、北海道へ行く途中での集会です。)  
○7月10日(火)夜7時頃、舞鶴市西方寺 添田宅集会 問い合わせ 電話 0773-83-0230 (添田)

○7月12日(木)夜8時、7月15日(日)正午頃 瀬棚聖

書集会。会場は、12日、14日は北海道久遠郡せたな町瀬棚区共和 農村青少年研修会館

15日(日)は、日本基督教団利別教会 問い合わせ 080-5595-6335 (野中信成)

○7月16日(月)休日 札幌交流集会・会場 かでる2・7 (道民活動センタービル) 札幌市中央区北2条西7丁目 問い合わせ 011-598-6383 (大塚)

○7月17日(火)苫小牧市 10時、12時 問い合わせ 電話 0144-33-6626 (大澤)

○7月18日(水)青森県弘前市での集会。青森県弘前市城西5の11の8対馬宅。午後1時、問い合わせ 電話 0172-36-9605 (対馬)

○7月21日(土)山形県鶴岡市 佐藤宅での集会 午前10時、問い合わせ 0235-22-4856 (佐藤)

○21日(土)山形市 18時、20時頃 大手門パルズにて 問い合わせ 023-625-4113 (白崎)

○22日(日)仙台市での主日礼拝 仙台市生涯学習支援センター 5階会議室(旧名称:中央市民センター)

午前10:30、問い合わせ 022-394-6128 (田嶋)

○23日(月)福島県本宮市 (あたら聖書集会場) 10:30、問い合わせ 0243-33-4516 (湯浅)

○24日(火)千葉県大網白里市 足立宅(大網聖書集会) 14時、問い合わせ 0475-52-0273 (深山)

○24日(火)千葉県市川市 土屋宅 18時、20時 問い合わせ 0436-66-5993 (土屋)

○25日(水)八王子での集会・八王子東急スクエア11階サウンドルーム 問い合わせ TEL 042-625-0178 (永井)

E-mail: nokonagai@yahoo.co.jp  
○26日(木)山梨県北杜市 山口宅 10時、12時 問い合わせ

せ 南アルプス聖書集会0552-82-2750 (加茂)、0551-32-0026 (山口)

○26日(木)16時、18時 関 聡宅 長野県千曲市鋳物師屋62の13 電話: 026-274-3131 sekisat@m2.avis.ne.jp

○27日(金)上伊那聖書集会 長野県伊那市西箕輪羽広 308801 10時、12時 問い合わせ 電話 0265-76-6646 (有賀)

-----  
○北田康広の讃美歌CD 「アメイジング・グレイス」 申込が続いています。讃美歌CDは以前からありますが、選曲が優れていて、歌詞、メロディーが心に残るものです。特価で「いのちの水」誌読者にはお送りできます。内容はインターネットで、「北田康広」で検索してもわかります。

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)  
郵便振替口座 〇一六三〇一五十五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座が定額小為替、または普通為替、または200円以下の切手で可  
です。